



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | J.M. Murryのロマン主義                                                                    |
| Author(s)    | 甲元, 健雄                                                                              |
| Citation     | 大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 96-104                                                        |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/98965">https://hdl.handle.net/11094/98965</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## J. M. Murry のロマン主義

甲 元 健 雄

John Middleton Murry (1889—1957) は、全身全霊をもって批評におけるロマン主義を实践したのであるから、かれのロマン主義についてのべようとなれば、その批評業績全般を問題にしなければならないことはもちろんであり、わたくしは以前、かれの主要著書を通してその批評の発展を跡づけ、かれの批評の性格を把握する一つの方法を提示したが、<sup>(1)</sup> この度は、かれが論題として Romanticism という語を真向から振りかざし、かれ独特のロマン主義の精神を開陳している二つの論考 *On Editing; and Romanticism* <sup>(2)</sup> と *More about Romanticism* <sup>(3)</sup> をとりあげ、二三の考察を試ることにしたい。

Richard Rees にいわせると、「Murry は実に手がるに自分の考えを表現できる上、うぬぼれがなさすぎるくらいだったので、一巻の書物をまるでパンフレットか社説でもあるかのように書きあげ、時宜をえたとおもうことを述べるとなると、数冊の書物の資料となるに足るほどの該博な知識と時間をかけた省察の成果を一度にそれに詰めこんで、浪費してしまう傾きがあった」<sup>(4)</sup> これは Murry の *The Free Society* を評しての言葉であるが、これから考察しようとする二つの論考についても、同じことがいえるかとおもう。つまり、一冊のロマン主義論に発展させうるだけの内容を、合せてわずか30頁の二つの論考で開陳しているからである。もっとも、これらの論考は、名著 *Keats and Shakespeare* となって結実したとみることもできるが。

(1) *The ALBION*, New Series No. 1 (京大英文学会)

(2) *To the Unknown God* p.74 (Jonathan Cape, 1924) 以下 T. U. G. と略す。

(3) *Ibid.* p. 134.

(4) *A Theory of My Time* p.152 (Secker & Warburg, 1963)

さて、*On Editing; and Romanticism* は、Mortimer という New Statesman 誌への寄稿家が、David Garnett の *Lady into Fox* がホーソンデン賞をうけたことをたたえ、これを証拠に、古典主義が英文学の支配権を握ってしまって、ロマン主義者達が Adelphi 誌を、最後の絶望的な抵抗の拠点としてあがいていると評したことに對する、Murry の反駁からはじまっている。

Murry は Romantic と Classic を敵對する二つの勢力とは考えない。またもしこれらの二つの勢力が對峙するとしても、*Lady into Fox* のごとき軍事的地勢を選んでは、敵も有利であるまいと耶揄しながら、文学の戦場で戦を挑むに価するものの影も形もみ当たらないと大見えを切り、遙かかなた右手左手の戦いでだれが勝とうが負けようが、われ関せずとうそぶいているが、<sup>(5)</sup> 因襲的な Romantic と Classic の争いに、かれが関心をもっていないことを表明しているわけである。

さらにかれは、Mortimer 氏が Adelphi 誌が Romantic の拠点であるというのを、文句なしに認めながらも、「もし自分が戦術家ならば、Mortimer 氏が無分別にこの雑誌に与えた Romantic の標号を額面どおりに頂載して、ロマン主義者とは、*Lady into Fox* などに真の重要性を認めない人のことをいうのであるから、自分もロマン主義者なのだぐらいいうところであろう」<sup>(6)</sup> と、紋切型の標号としての古典主義にもロマン主義にも、なんの関心もないことを仄めかしているが、身をもって時代の悩みを悩み、19世紀のロマン主義を超克し、近代精神がおしつめられているぎりぎり決着の急場を乗りきろうとする Murry であってみれば、情意偏向個人主義的なロマン主義などを問題にするはずはなく、文学の流派としてのイズムなどには、なんの未練もないというのであろう。

---

(5) cf. T.U.G. pp. 79,80.

(6) T. U. G. p. 80

さらに Murry は、Romantic と Classic の対立に関心をもたない他の理由として、イギリスという環境においては、語るにたるだけの古典主義が育たなかったからであるという。「イギリスには古典はあるが古典主義はない。しかも、わが国の古典はすべてロマン主義的である。なぜなら、イギリスの偉大な作家がおのずから守る法（のり）decorum というものは、かれらが心の底から吸みだすものであるからであり、それは伝統や権威によっておっかぶされるものではないのだ<sup>(7)</sup>」<sup>(7)</sup>といて、古典主義者がイギリスでは、一種のもぐりであって、イギリス人の肌にはあわない人間だと極めつけるような口吻である。

では、偉大な作家が心の底から法（のり）を吸みだすとは、いかなる意味であろうか。それは、Murry の批評を一貫して流れている「自己否定」の観念につながるものであって、これを宗教的にいえば、イギリスの伝統は、「真に自己を問いつめれば、ついには神の声をきく」ということ、また文芸批評の用語でいえば、「作家は個性を通じて、非個人性を達成することができる<sup>(8)</sup>」<sup>(8)</sup>ということである。例えば、Murry の Arnold 論は、Arnold の心の中にあった Romantic と Classic の相剋のために、結局 Arnold が自同性 identity<sup>(9)</sup>を達成できなかったことを、かれの詩を通じて明らかにしようとしたもので、Arnold が自己を揚棄できなかったために、先天的根拠に立っての重大な行為と、かれ個人が重大だと感じた行為とを区別するだけの勇気を欠いていた。そのため *Merope and Balder Dead* は失敗作だと断じているのもこれがためである。<sup>(10)</sup>

さて「自己否定」とか「個性を通じて非個人性を達成する」という精神作用

---

(7) T. U. G. p. 81.

(8) *Ibid.* p. 82.

(9) cf. *Discoveries* p. 219 (Jonathan Cape, 1940)

(10) *Ibid.* p. 223.

は、Murry の新ロマン主義思想の中心をなすものであるが、これは一体どういうことなのであろうか。

Murry はいう。「一般世界に対して遊離的であることはさして困難ではないが、この種の遊離は、安価なキニク主義の形をとることは必然といってよい。自己脱却に基づかない遊離は、不遜といつてよいであろう。自己からの遊離は実に困難な業である。それには苛酷な自己分析が求められるからである。……この遊離作業は、自己を対象化する力を発現させるところにある。自己における主客の分離、つまり認識する自我 *self-knowing* と認識される自我 *self-known* とを区別することから出発しなければならない。ここで困ることは、認識する自我を最小限にまで縮小することの困難である。これは論理的に不可能といってよい。しかしこの不可能も、つぎの方法によって回避することができる。第一に、知性そのものの検討によってである。人間は、本能や情感の衝動に受動的な動物とし自身を意識することが容易であると同様に、人間はまた、思想の来現にも受動的な動物として自身を意識することも容易である。こうしてわれわれは、精神が感覚器官の一つであることを悟るのである。このように知性を根本的に検討することと、主体としての自我の脱皮をおしすすめることが不離の関係にあることはもちろんである。この弁証法的前進は、一つの精神的な勝利といってよく、認識する自我が、もはや主体の純粋性を汚すことができないのである。……この純粋性をもって外的事象を観照すれば、われわれは、主体の分析にではなく、客体としての事象にわれわれの全エネルギーを集中することができ、その客体の犯しがたい独自性に完全に受動的になることができ、その客体に関する「なに」「いかにして」「どこで」「なぜ」の問題はわれわれの意識の関するところではなく、その事象が存在するという明白な神秘に、われわれの意識はかかわるのだ。<sup>(11)</sup>かくして知性は、いわば自動的に、感覚流動の器官の一つとしてそれ本来の地位に退かされるのである。われわれは、静観の行為と瞬間そのものにおいてではなく、感覚的知覚

---

(11) cf. A. Huxley : *Literature and Science* p. 23. (Chatto & Windus, 1963)

や知性に依存しない想像的直感力によって、われわれ自身を静観することができる」<sup>(12)</sup>

以上が Murry の芸術における「純粋意識」「自己否定」を達成する過程であり、個性を通じて非個人性を達成するこの作業は、かれが *Keats and Shakespeare* の5章で開陳する soul-making のそれにつながるものである。この作業から純粋な詩人の驚くべき自発性が生まれるものであって、*The Case of John Clare* も、Clare にみられるこの純粋性を強調したものである。<sup>(13)</sup>

したがって、Murry が考える現代人の不幸は、「われわれが個体主義を充分つきすめないことであり、真正なロマン主義者でないということである。ロマン主義者になれる途は、いくつもあるというのではない。ロマン主義は、自由思想 *libertinism* や平等主義 *egalitarianism* などとは、にてもにつかぬものである。それは、本質的に自我を通じての實在の探究であり、その實在においてわれわれが発見するものの受容 *acceptance* なのである」<sup>(14)</sup>

Murryは、Wordsworth, Shelley, Keats が直面した問題は、Tolstoy, Dostoevsky, Tchegov も真正面から取組んだ問題であったとし、その問題とは、結局「人間はいかにして生と和解できるか。和解と受容は可能であるか」<sup>(15)</sup> ということであったというのも、この受容の重要性をとりあげているわけである。

さて1923年10月 *On Editing; and Romanticism* を *Adelphi* 誌に発表したその翌月、Murry は同誌に *More about Romanticism* を掲載した。前者で「文学の戦場では戦を挑むにたる好敵み当らず」と大見得をきったかれが

---

(12) *The Detachment of Naturalism* (*The Criterion*, July 1930) cf. *Studies in Keats* p. 91 (Oxford, 1930)

(13) cf. *Discoveries* pp. 209, 210, 211.

(14) T.U.G. p. 84.

(15) *Russian Literature* (*Discoveries* p. 129)

後者では、Criterion 誌の有能な主筆 T. S. Eliotこそ自分の真の敵であるとわかったといい、好敵ごさんなれと、自分のロマン主義の理念を系統立てて開陳しようとする。「(1)自分はロマン主義者である。(2)ロマン主義の根本的態度は、古典主義が外的な精神的権威への服従であるのに反して、内面的な声への服従である。(3)英文学およびイギリス人一般の精神生活は、ロマン主義的である」<sup>(16)</sup>と、まず前の論考の要点を箇条書きにし、さらに筆をすすめて、「自分が攻撃しようするのは古典主義でなく擬古典主義なのだ。自分は、カトリック教会がその所をえて存在した事実とその価値を認めるのと同じく、古典主義もその所をえて存在した事実やその価値もみとめたい。古典主義とロマン主義は、両極的に相容れない二つの真理ではなく、知的真理としてのその共存の原型はプラトンのアイデアの世界にもすでにみられて、自分はそれらが共存しうることを疑はない。しかし歴史的事実として、これら二つの主義は容認しあうことはできても、実際の積極的信念としては、この二つは絶対に相容れないものであり、人はそのいずれかをとりざるをえないし、現在という時点においては、人は Romantic であらざるをえない」<sup>(17)</sup>とのべている。ヨーロッパの過去における最も重要な事実はキリスト教であり、Murry もキリスト教とわれわれの関連を意識することにおいて、決して人後におちるものではない。しかし関連を意識するということは、過去に帰るということではなく、この関連をふまえて一步前進することである。これと同様、かれは古典主義の価値も充分みとめている。「人間の霊の歴史は、組織化されて古典主義となったロマン主義とロマン主義に反抗され打倒された古典主義との歴史にほかならぬ」<sup>(18)</sup>しかし現代は、ルネッサンスにはじまった近世の総決算の時期でなければならぬ。外なる精神的権威に対して自己を主張し、人間自身の経験によって人間の運命を決

---

(16) T. U. G. p. 134.

(17) T. U. G. p. 135.

(18) *Ibid.* p. 136.

定し、自らの力で宇宙を探究しようとした人間は、ロマン主義者でなくてなんであつたろう。このロマン主義を予言する声として Shakespeare がある。このロマン主義の精神が危険に瀕している今日、われわれはこれを救いこの主義を極限にまでおしすすめて、これによって人間は救われないものであろうか。ここから Murry のロマン主義の再検討と、真のロマン主義の核心をつかもうとする努力がはじまる。

人間が自力で宇宙を探究しようとしたとき、探究すべき宇宙が二つあった。すなわち、「外的宇宙」と「内的宇宙」である。最初は、外的宇宙の探究の方が一そう興味あるものであったが、Dampier や Anson が南大平洋航海や世界一周を成就するまでに、われわれの心胆を寒からしめるような Galileo の発見が理解されはじめていた。地球は地方的存在となり、地球上の人間も完全に些細な存在と変じてしまって、中世の神の怒にかわって、それ以上に恐ろしい「必然」Necessity が、いつのまにやら君臨していくのではないかという不安を感じるようになった。外的宇宙は、不愉快なことに法則の支配する世界として暴露されたのである。この有様に Voltaire は大笑いを禁じえず、Diderot はこの外的世界の図表化に余念がなかった。この外的世界に背をむけ内的世界をみつめて、内的世界の根本真理を、この真理の適用をうけない外的世界をふまえて開陳しようとする誤りを犯した人が Rousseau であった。「人間は生れながらにして自由であるが、いたるところで束縛されている」という Rousseau の言葉は、「人は自由であるが、いたるところで必然 Necessity の支配を受けねばならぬ」<sup>(19)</sup>と訂正すべきである。Murry は、この人間の存在と人間の知識との根本的な矛盾と照合しなければ、ロマン主義の完全な解剖は不可能であるとみて、つぎのような説明を試みる。「人間は宇宙をしろうとするとき、自分の外部には必然の領域を、内部には自由の世界をみ出す。外的世界の認識は、その世界が必然の世界であることの認識を必要条件とし、内的世界の認識は、

---

(19) *Ibid.* p. 138.

その世界が自由の世界であることの認識を必要条件とする。この二つの認識は、いずれも認識であることに変わりなく、しかも種類において異なりその内容において矛盾する認識なのである。この矛盾を意識する度合によって、素朴なロマン主義と高度のロマン主義の差が生じる。前者は自由な内的世界に沈潜し、必然の世界を反撃をくわえねばならぬ脅威、また外的世界を放逐せねばならぬ幻影の世界としてしか意識しない。……自由と必然の矛盾をこのように一方的、自己本位的に解決しようとしても無駄である。もし人間の意識が元来、相容れない範ちゆうのもとでしかその経験世界を理解できないというのなら、われわれは人間の意識の性質そのものに変化のおこるのをまたねばならぬ。大ていの人々は、この考を荒唐物稽とおもうかもしれないが、人類学を人間の魂の真実の記録としてよむ人には決してそうはおもわれないであろう。文学における最も偉大な真に近代的な精神の持主 Shakespeare, Tolstoy, Dostoevsky<sup>(20)</sup>の心を支配していたものが、この意識の変革であったことはたしかである」

引用(18), (19) はかなり長くなったが、Murry の *Keats and Shakespeare* や *Dostoevsky* を読む場合の予備知識として、このことは特に重要と考えるからであり、かれのロマン主義が正しいとか正しくないとかの問題ではなくて近世の総決算としての現代におけるその新ロマン主義の必要性を、かれが強調している点を明らかにしたいためである。

Murry が考えるカトリック教会は、キリストのロマン主義が組織化されたものである。<sup>(21)</sup>カトリック教会は、冒険的な人間の魂を抑圧してきたものであるが、ルネッサンスはこの抑圧に対する反抗であり、この反抗は、蛇が脱皮するごとく簡単にローマ教会と絶縁することができたイギリスにおいては、最も容易でまた完全なものであった。ローマ教会に決定的に支配されなかったイギリスにおいて、とりわけ個体主義をその国民性とするイギリス人がロマン主義の代表者となることになんの不思議もない。「イギリス人のロマン主義は、すべ

(20) *Ibid.* pp. 140, 141. cf. *Literature and Religion* (T. U. G. p. 191)

(21) cf. *Need of a New Psychology (Things to Come)* pp. 19, 20. Jonathan Cape, 1928)

ての古典主義を排除するものではない。——純ロマン主義的症例は精神病院でしかみられない。それは、ちょうど純古典主義的症例が博物館でしかみられないのと同じだからである<sup>(22)</sup>』といい、Murry 自身もロマン主義が個性の放任主義でないことを強調していることは明らかである。W. M. Dixon も1915年ケインブリッジにおける Leslie Stephen 記念講演で、英国民性と詩との関係<sup>(23)</sup>を論じて、ロマン主義がイギリスで、詩歌となってその花を咲かせたのは、イギリスがローマ教会の完全な支配下におかれなかったことに、一つの大きな原因をみ出していることを付記したい。英国民性がロマン主義的であるからロマン主義が正しいとはいえないという反駁が、T. S. Eliot によってなされたことに対して、Murry もそれに異論はない。ただ先にものべたように、ロマン主義が、是が非かの問題ではなくて、Tolstoy, Dostoevsky に象徴されるロシアの偉大な努力が崩れてしまい、Whitman, Melville に象徴されるアメリカの非常な努力が、機械文明的沈滞に終わっている今日、実際的実験的なイギリスのロマン主義に、Murry は活路をみ出したいというのである<sup>(24)</sup>。

以上 Murry が Romanticism を論題としてかかげた二つの論考の意義を他の二三の論考を参考にして解明した。実はさらに、Murry が T. S. Eliot の有能を充分みとめながら、結局 Eliot の思想は、第一次世界大戦後のイギリスの思想の混乱を救いえないと断じる理由についても考察したいのであるが、それには Murry の別の論考をとりあげねばならないし、与えられた紙数もつきたので、これについては稿をあらためて解明するつもりである。

---

(22) *Ibid.* p. 143

(23) *cf. Poetry and National Character* pp.8,16 (Cambridge, 1915)

(24) T. U. G. pp. 144, 145.